

ダンサーになるため来日したのに…

路上から「生還」向き合えた

人身取引被害の女性が手記

最初に覚えた日本語は「ニマンエン(2万円)」。
あとで知ったが、それは自分の体の値段だった。
コロンビアから来日し、性産業に従事させられていた
女性が、体験をつづった本「サバイバー 池袋の路上
から生還した人身取引被害者」(発行・ころから)を
出版した。著者のマルセラ・ロアイサさん(38)が現
在暮らす米国で取材に応じた。

ロアイサさんは来日前、
2歳の娘を抱えるシングル
マザーだった。スーパーで
働きながら、母親や弟妹ら
を支える生活。金を稼ぎた
いと日本行きを望んだ。ダ
ンサーをすると言われ、手
引きする男から偽の旅券や
航空券などを渡されて19
99年5月に来日した。21
歳だった。

空港で待っていたのは30
代半ばのコロンビア女性。
そのまま車に乗り、連れて
行かれたのは管理売春の世
界だった。旅券を取り上げ
られ、来日手数料として5
00万円の借金があると脅
された。「働く許可を得る
ためにヤクザに金を払え」、
振る舞いが悪ければ「ヤク
ザに売り飛ばす」と言われ
た。

マルセラ・ロアイサさんは出
版された日本語版をいとおしそ
うに手にとった。米国

「ケリー」という名で東
京・池袋の路上に立った。

意味も分からず、教えられ
た「ニマンエン」「オッパ
イ、オオキイ」という言葉
を男に投げかけた。

全身に入れ墨が入ったヤ
クザの客から暴力を受け、
2週間の入院を余儀なくさ
れたこともある。千葉・木
更津のファッションヘルス
やストリップ劇場のほか、
横浜でも街娼として働かさ
れた。2001年、さらに
借金を負わされそうにな
り、コロンビア大使館に逃
げ込んだ。

故郷に戻ったロアイサ
さんは日本での体験をだれに
も言えず、泣いてばかりい
た。3年間、心理治療に通
った。治療の中で「フラッ
シユバックがあったら何で
もいいからメモするよう
に」と言われ、体験を書き
留めた。心理士に勧めら
れ、それらをまとめてコロ

ンビアで出版したのは09
年。その日本語の翻訳版を
今年8月に出した。

米国人男性と知り合って
結婚し、いまは飲食店で働
きながら会社員の夫と娘と
米国で暮らす。米国とコロ
ンビアで財団を発足させ、
人身取引の被害者を支援す
る活動もしている。

「娘のことを考えること
で、生きることができた」
とロアイサさんは振り返
る。「いまは日本での経験
には意味があったと考えて
いる。ほかの被害者も抜け
出せると伝えたい」。つい
最近まで日本人男性に会う
と、怖くて涙が出た。「で
も、いつかは、自分が立っ
ていた池袋や新宿の街を夫
と歩き、日本は美しい国だ
と感じたい」

NPO法人・人身取引被
害者サポートセンター「ラ
イトハウス」代表の藤原志
帆子さんは「南米の女性た
ちは本当に劣悪な状況で働
かされていた。ひとりの女
性がこれだけ赤裸々に声を
あげたことはこれまでにな
く、勇気に感謝する。被害
者の国籍が違っても、いま
も同じようなことが起きて
いる」と話す。

四六判224頁。税抜き
1800円。

(編集委員・大久保真紀)